

シェイクスピアの研究

中野春夫

当該年度(2018年4月～2019年3月)のシェイクスピア研究関連は企画ものの成果という点では少し寂しい結果となった。ここ数年、何点か刊行されていた科研費関連や学会記念事業などの企画論文集が没後400周年(2016年)を過ぎて一段落したらしく、今年出版されたものは1点にとどまった(ようである)。その分なのだろうか、把握できている限りで言うと紀要等に発表された論考の数は例年と比べて多めの印象を受ける。10年前、20年前と比べて校務や教育に割くべき時間と労力が格段に増えている現状を考えてみれば、間違いなくシェイクスピア研究は健闘していると思う。そのうえで、お願いがあります。

シェイクスピア研究の未来はひとえに若手研究者の育成にかかっていますので、企画論文集などでは可能な範囲で若い世代に多くの機会をお与えいただければ幸いです。機会をもらった若手の方はなるべく早い時期から作品分析を意識して、しっかりした作品論を発表できるようにして下さい。10年後、20年後は皆様がシェイクスピア劇の話で院生や学生の胸を躍らせるのが務めになります。

まずは単著の紹介から(出版順)。野上勝彦『〈創造〉の秘密——シェイクスピアとカフカとコンラッドの場合』(彩流社、2018年4月)は、「独創性」と「創造力」という芸術活動の根幹にあたる概念を中心に据えて、シェイクスピアの『ハムレット』(第1章)と『リア王』(第3章)、コンラッドの『闇の奥』(第4章)、カフカの『変身』(第5章)の仕掛け、台詞の効果、あるいは登場人物の設定を解説する。シェイクスピア関連の成果としては、第3章におけるコーディリアのキャラクター分析が丁寧で、第2章の劇中劇の考察も興味深い。

小野俊太郎『ハムレットと海賊——海洋国家イギリスのシェイクスピア』(松柏社、2018年6月)は、イングランド王国の海洋国家への転身という16世紀後半期から始まる重要な現象に着目し、海洋と関わるシェイクスピア劇の設定や背景、場面を分かりやすく解説してくれる。本書の魅力は「海洋」をキーワードにして、航海や交易、交通網だけでなく海賊行為(第1章)、さらには地中海(第2章)や新大陸、アイルランド、アジアへの進出(第3章)と、イングランドの海外進出と関わる重要な論点をほぼ網羅的にとりあげているところにある。第4章の歴史劇やローマ史劇分析にも、海洋という視点を導入したところは新鮮である。解説する場面の選び方も巧みであり、イングランドの諸制度が「海洋」経由で世界中に拡散していくプロセスの最初期を、シェイクスピア劇を題材として分析したいという研究者や院生・学生には大いに参考にな

る一書。

梅宮創造『シェイクスピアの遺言書』（王国社、2018年6月）は「遺言書」を切り口として、シェイクスピア劇の遺言やシェイクスピア自身の遺言書から日本のシェイクスピア受容、道化、「虚なるもの」、『カルディーニオ』まで様々な対象を新たな視点から照射する論考。確かにハムレットに対する亡霊のお告げは「あの世からの遺言」とも解釈できるし、オリヴィアがシザリオに示す自分の容姿の「財産目録」は遺言書というコンテクストから分析してみると新たな面白さが見えてくる。テキスト分析の可能性と可動域を拡げた成果であり、巻末近くにある「遺言書補遺」の情報と分析も有益。

竹村はるみ『グロリアーナの祝祭——エリザベス一世の文学的表象』（研究社、2018年8月）は、エリザベス一世表象の生成過程を即位式から最晩年まで、宮廷祝祭と文学作品との影響関係に焦点を合わせて検証するという並外れたスケールの労作である。本書は7章構成で、それぞれの章は時代順に宗教紛争や外交問題、寵臣の権力闘争など王国とエリザベス宮廷に起こる重要事件を扱い、その政治的、宗教的、文化的コンテクストの中で催された様々な宮廷祝祭とその中心となるエリザベス礼賛の特性を詳細に解説してくれる。戴冠式パジャントから法学院祝祭、地方行幸、馬上槍試合、肖像画まで、エリザベス朝の宮廷祝祭と見なしうるものがほぼ網羅的に解説され、かつ祝祭のエリザベス表象の特性と演劇作品や騎士道ロマンスにおける文学的な処女王礼賛のフォーマットとの影響関係も明快に検証されている。〈未婚の乙女〉から〈非婚の乙女〉への変化を解説する第4章は必読の章。

高田茂樹『奈落の上の夢舞台——後期シェイクスピア演劇の展開』（水声社、2019年3月）は1599年以降の7作を対象に、シェイクスピア劇特有の魅力を具体的な台詞分析と歴史背景の説明を重ねながら緻密に論じる重厚な成果である。文学的解釈型の『ハムレット』批評であれば「人間存在」や「狂気」を中心テーマに挙げつつ、批評者個人の見解を語るのが通例だが、本書の関心はその種の答えではなく、どのような設定（台詞・登場人物）が読者・観客の問題意識をどう刺激していくかという『ハムレット』の面白さの核にあたる現象を説明することにある（第2章）。『オセロー』における夫婦関係の「姦通不安（嫉妬）」、『尺には尺を』における王国の「統治／裁き」、『冬物語』では家族関係の「認知・再認識」など、個々の劇作品の主題がなぜ読者・観客の関心を惹きつけてきたのか、言語化するのが難しいその劇作術の秘訣を論理的に説明しているところが見事。作品論としても優れている。

その他、シェイクスピアと関連する一般読者向けの著作物として川地美子『世界を旅するシェイクスピア』（中央公論事業出版、2018年4月）があり、同書はシェイクスピア受容の特徴と傾向を時代（第2章）と地域（第3章）に分けて、上演の最新情報を交えながら解説する。第3章はアメリカ合衆国とカナダに始まって32地域のシェイク

回顧と展望

スピア受容を紹介し、シェイクスピアが世界遺産的な文化的アイコンであることを実感させてくれる。菊山榮『シェイクスピアの生物学』（学校図書、2018年12月）は、シェイクスピア劇で言及される医学関連の表現を話の枕に、「遺伝」や「性」などのトピックを生物学的に解説するエッセイ。血液は約50秒で体内を一周するなどの蘊蓄が面白い。

日本シェイクスピア協会の機関誌 *Shakespeare Journal*, Vol. 5 は「初期近代演劇と宗教」の特集を組み、以下の四本の論考を取めている。安達まみ「シェイクスピアにおける修道女の表象型——歴史(history)と物語(story)にみる文化的記憶と忘却」は、「貞潔と道徳的脆さの相反する道徳的テーマ」に収斂していく近代初期イングランド演劇特有の修道女表象を指摘したうえで、その事例を『尺には尺を』で具体的に検討する。二年前の著書で網羅的に調査した成果を踏まえた手際のよい論証が印象的であり、『尺には尺を』の(悪名高い)エンディングに対して新たな解釈を提示している。前原澄子「ローマ・カトリック教会への抵抗——『ハンティントン伯ロバートの失脚』と『ハンティントン伯ロバートの死』における寓意」は、タイトルの二作におけるマチルダ伝説の演劇化をローマ・カトリックへの抵抗という視点から丁寧に解説したうえで、エリザベス朝末期に生じた複雑な宗教的寓意の成立を指摘する。郷健治「ファッション概念の誕生と『欽定説教集』と『から騒ぎ』——*Much Ado About Nothing* 再考」は、“fashion”が「服飾の流行」という意味で使われたのが16世紀後半期であったことに注目し、『欽定説教集』第2巻(1563年出版)の「華美な衣服を戒める説教」をその新たな意味が生まれる社会的要因として挙げたうえで、『尺には尺を』の観客が劇世界のファッション諷刺をこの説教を下敷きとして理解していた可能性に言及する。「流行」の意味の起源を指摘するくだりが刺激的。木村明日香「『アントニオの復讐』と『ハムレット』における夫の亡霊と寡婦の記憶」は、亡霊の実在性、秘跡としての結婚、死者への追憶などカトリックとプロテスタントが鮮明な見解の違いを見せるシェイクスピア時代の宗教的コンテクストを分かりやすく解説したうえで、タイトルの復讐劇二作を対象として「夫に先立たれた妻」表象の宗教的特性を検討する。

Shakespeare Journal は特集企画論文以外に一般の投稿論文も掲載しており、今回は以下の三点が収録されている。神山さふみ「『じゃじゃ馬ならし』における結婚——心を陽気にする芝居」は、『じゃじゃ馬ならし』を序幕、主筋、副筋という三つの構成要素に分けたうえで、それぞれに投影する同時代の社会的コンテクストを丹念に分析し、従来から様々な議論を呼んできたエンディングを、浮浪者取り締まり法による社会関係からの放逐・離脱という劇全体に共通するテーマから新たに分析し直している。土井雅之「“where any honest men resort”——『間違いの喜劇』に見る東地中海への興味とそのイメージの変化」は、『間違いの喜劇』に登場する地理的情報に焦点を当て、舞台設定をエフェソスに変えるなど、材源の『メナエクス兄弟』に対してシェイク

シェイクスピアの研究

スピアが行った種々の変更が同時代のロンドン商人の東地中海地域における交易上の関心を投影していることを論証する。大住有里子『『ロミオとジュリエット』の死のドラマトゥルギー』は、一連のロミオ物語の中でシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』が恋愛悲劇としてどこがどう観客・読者を引き付けてきたのか、オウィディウスの「ピュラマスとテスベ」から18世紀の改作劇まで網羅的に大団円での恋人たちの死に方を比較検討し、シェイクスピア劇だけに見られる諸特性を指摘する。

日本シェイクスピア協会の英語版学術誌 *Shakespeare Studies* は当該年度に第57号を発刊し、以下の二点の論文を収録している。Mariko Ichikawa (市川真理子)、“‘The Tire-house door and Tapistrie betweene’: What Is the Location Implied in This Phrase?” は、リチャード・タールトンのコミカルな登場を描写した表現を話の枕として、同時期の芝居小屋では「楽屋正面」の出入りが基本的に左右と中央の三カ所に設けられ、そのうち中央部の出入り口だけに「一對の(すなわち真ん中が空く)カーテン」がつけられていた可能性が高いことを、出入り口に言及した様々なト書きを引きながらスリリングかつ説得力豊かに論証していく。『ハムレット』の第3幕第1場でクローディアスたちがどのように立ち聞きするのか、この舞台構造理論を応用した場面解説も見事。Miki Iwata (岩田美喜)、“Brothers Lost, Sisters Found: The Verbal Construction of Sisterhood in *Twelfth Night*” は、三組の結婚による伝統的な家父長制度への回収が強調されがちな従来の『十二夜』批評に対し、ヴァイオラとオリヴィアに施された家族関係の特異な設定に注目し、ヴァイオラの巧みな台詞の表現が家父長制度から逸脱した両者の間に法的な姻族関係だけでなく姉妹としての連帯感をも生み出す現象を指摘する。繊細な台詞分析が印象的であり、論文最後のアナグラム解説が面白い。同号の Book Reviews には Takayuki Katsuyama (勝山貴之)、Tamaki Manabe (真部多真記)、Kazuaki Ota (太田一昭)、Atsushi Tanamachi (棚町温)、Performance Reviews に Rosalind Fielding、Moe Sakai (酒井もえ)の各氏が寄稿している。

日本英文學會の学会誌『英文學研究』第95巻にはシェイクスピア関連の論考として高森暁子「歌に酔いしれて——イアーゴの歌」が収録されている。『オセロー』の小唄といえば殺害される直前にデズデモナが歌う「柳の歌」がよく知られるが、この論文は第2幕第3場でイアーゴが歌う小唄二曲を対象として、悪党イアーゴの誘惑がすでにこの小唄から始まっていたことを指摘する。シェイクスピアの小唄 (songs) は国内外を含め必ずしも十分に研究されてきた対象とは言えないが、本論はシェイクスピア劇と同時代の歌謡文化との関係を手際よく解説したうえで、当時の流行歌に関する観客のリテラシーを想定することにより、イアーゴの小唄がキャショーだけでなく当時の観客をもメンタル・コントロールのターゲットにしていたことを力強く論証する。

回顧と展望

日本英文學會『英文學研究支部統合号』第11巻には初期近代イングランド文学関連として、各支部合わせ六本の論文が収録されている。北海道支部号『北海道英語英文学』第63号では奥山厚子『『ロンドンの三貴族と三淑女』における「金銭」と「壮麗」の結婚』が、アルマダ海戦の勝利など16世紀末の政治的・経済的状况に着目し、1590年に出版された道徳劇における寓意性が伝統的なキリスト教の寓意から同時代の社会的コンテキストへずらされていることを指摘する。『関東英文学研究』第11号には三本のルネサンス期博物誌文献・文学関連の論考が収録されており、特別寄稿論文で浜名恵美「デジタル・ヒューマニティーズの本格的導入の提案——日本の英語文学研究の resilience のために」は、人文学の危機が広く認識、共有されている状況の中、「伝統的な質的分析の文学研究」を私たち英文学者がどう変えていく必要があるのか、その方向性に関する貴重な提言を行っている。投稿論文では高橋美紗子の英語論文“‘[A] very pestilent disease’: Werewolves Retold through Narratives of Flesh Consumption and Alteration in Early Modern Natural History”が、近代初期ヨーロッパにおいて「狼憑き(werewolves)」言説がメランコリー理論や魔女論争と結びついて多様な発展を遂げる現象を幅広い領域の一次資料から検証し、そのなかでイングランド版とも呼びうる言説の特性が『モルフィ公爵夫人』や『テンペスト』での言及に投影していることを示す。同じく投稿論文の木村明日香『『モルフィ公爵夫人』における少年俳優の舞台上の効果』は、実際の舞台でリチャード・ロビンソンという少年俳優が公爵夫人を演じた可能性に注目し、現実の上演が十代後半と目されるロビンソンの身体性と徒弟の従属的地位を劇世界における公爵夫人の女性表象と交感させるというメタシアトリカルな娯楽を提供していた可能性を指摘する。

『中部英文学』第38号では小嶋ちひろの英語論文“Spatial Representation and Narrative in *The Puritan, or the Widow of Watling Street*”が、セント・ポールヤワトリング・ストリートなど現実の空間と入り混じったフィクションの空間表象に着目し、トマス・ミドルトンの『ピューリタン』におけるメタシアトリカルな特性を現実世界におけるピューリタン説教師ウィリアム・クラショウの演劇攻撃と関連付けながら論じる。『九州英文学研究』第35号には懲憑論文として大島久雄『『テンペスト』のジェームズ朝のインターテクスチュアリティ～シェイクスピアと書物～』が掲載され、同論文は『テンペスト』に取り込まれた様々な材源を具体的に分析し、同作品とヴァージニア会社パンフレットやノース・ベリック魔女裁判の報告書、トマス・アキナスの『君主の政治』などとの間に成立する「ジェームズ朝のインターテクスチュアリティ」の特性を考察する。

中央大学人文科学研究部編『英文学と映画』研究叢書69(中央大学出版部、2019年3月)は英文学の原作と映像芸術の翻案作品との関係を多様な角度から論じる八本の論考から成る論文集であり、シェイクスピア関係では以下の1点が収録されている——

シェイクスピアの研究

篠崎実「時にしたかわねばならぬ」——オーソン・ウェルズの『オセロー』をめぐるて、

大学紀要などの学術誌に掲載された論文には以下のものがある(姓名の50音順)——
荒木純子「ベン・ジョンソンの「新世界」と急進派ピューリタニズム——宮廷仮面劇と宗教的熱狂」, 学習院大学文学部『研究年報』第65輯; 今西雅章『「空騒ぎ」における今一つの「影」——侍女マーガレットの性格分析」, 帝塚山学院大学『こだはら』第41号; 太田一昭「Pervez Rizviの初期近代英国演劇連語データベース」, 九州大学大学院言語文化研究院『言語文化論究』第42号; 岡田典之「マーガレット・キャヴェンディッシュ: 錬金術と復活の床」, 龍谷大学『龍谷紀要』第40巻第2号; 梶原将志「演劇＝戯れの呪縛——カール・シュミットの『ハムレット』論と悲劇観」, 松山大学『言語文化研究』第38巻第2号; 勝山貴之『「空騒ぎ」と「食」のイメージ——1590年代におけるスペイン無敵艦隊の脅威」, 同志社大学人文学会『英語英文学研究』第100号; 加藤弘嗣「中国趣味, ウォルポール, そして演劇検閲法——ウィリアム・ハチェットの政治風刺をめぐるて」, 関西学院大学英米文学会『英米文学』Vol. LXIII Ser. No. 88; 金井友梨佳「シェイクスピア劇における法律, 宗教, 権力の関係性」, 早稲田大学英米文学研究会『ほらいずん』第50号; 工藤敦子「“a poor old man”と*King Lear*の悲劇性の一側面」, 龍谷大学大学院英語英米文学会『英語英米文学研究』第46号・ジョン・ドゥーギル教授退職記念号; 熊倉麻名『「ハムレット」におけるケルトの表象——生け贄を捧げる者』, 『日本女子大学英米文学研究』第53号; 近藤直樹「Aphra Behnの*The Young King*について——愛の神と戦いの神」, 大阪府立大学人間社会システム科学研究科・人間社会学専攻言語文化学分野『言語文化学研究 英米言語文化編』第14号; 近藤弘幸「明治の『ロミオとジュリエット』——シェイクスピアと日本の英語教育」, 中央大学人文科学研究所『人文研紀要』第91号; 今野史昭『「リチャード二世」(1857)と年代記」, 『明治大学教養論集』通巻533号; 常名朗央『「ロミオとジュリエット」におけるカーニヴァル性——ロザライン登場の意図について」, 英語英文学論叢『片平』第54号; 辻川美和「ジョン・フレッチャーの喜劇の侍女達——性的に放縦というイメージの扱い方の変遷」, 新英米文学会『New Perspective』第49巻第1号; 辻川美和「ジョン・フレッチャーの劇の女装——笑劇, 観客からの情報隠し, 少年俳優の曖昧なエロティシズム」, 日本英語英文学会『日本英語英文学』No. 28; 中野春夫「魔女の小唄——『マクベス』の挿入歌」, 学習院大学文学部『研究年報』第65輯; 本多まりえ「お茶の間のシェイクスピア——没後四〇〇年記念ドラマ『夏の夜の夢』(二〇一六)と大衆文化」, 明治学院大学言語文化研究所『言語文化』第36号; 菰内彩奈「オリエンタリズムのジレンマ——NINAGAWA SHAKESPEAREにおける蓮の解釈を中心に」, 早稲田大学英米文学研究会『ほらいずん』第50号; 渡邊彩子「*Hamlet*における復讐の義務と道徳哲学の葛藤——Shakespeareの*Hamlet*における

回顧と展望

Ciceroの影響」, 日本女子大学大学院文学研究科英文学専攻『Veritas』第40号.

本年度の大学紀要, 大学英文学会機関誌における英語論文は以下の通りである(姓名アルファベット順)——Yuto Koizumi “Adapting Shakespeare’s *Henriad* and Reconsidering Misogyny: Narcolepsy and Nostalgia in Gus Van Sant’s *My Own Private Idaho*”, 早稲田大学英文学会『英文学』第105号; Tomoe Komine “Yukio Ninagawa’s *The Merchant of Venice* (2013): A Rejection of Interculturalism”, 東北大学「詩論」英文学研究会『試論』第53集; Tamaki Manabe “John Foxe’s “Oldcastle Controversy”: *Acts and Monuments*”, *The Tsuda Review*, No. 63.

翻訳関係の成果には, 鹿児島近代初期英国演劇研究会(小林潤司, 杉浦裕子, 丹羽佐紀, 山下孝子, 大和高行)による『王政復古期シェイクスピア改作戯曲集』(九州大学出版会, 2018年4月)がある. 百年以上にわたって原作に代わり上演され続けたにもかかわらず, ネイハム・テイトやコリー・シパーのシェイクスピア改作劇はこれまで邦訳が存在しなかった. 同書にはテイトの喜劇版『リア王』など待望の翻訳が四点収録されており, この有意義な成果を機に18世紀の受容史研究もさらなる発展を遂げてほしい. 大場建治訳『ソネット詩集』(研究社, 2018年5月)は「対訳・注解研究社シェイクスピア選集」シリーズの別巻として出版され, これで十一点すべて刊行されたことになる. 原文と訳文を見開きで並べる体裁になっているので利用する側には大変便利な一方, 翻訳者には大変なプレッシャーがかかったと思う. お疲れ様でした. 雑誌に掲載された成果には以下のものがある——ハーリー・グランヴィル＝パーカー「『オセロー』序説(1)」大井邦雄訳述, 『北方文学』第77号. (学習院大学教授)